

復活節第2主日礼拝 説教 「私たち信仰者の生涯」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年4月11日

イザヤ書 65章 17～25節 マタイによる福音書 28章 11～15節

イースターを共に祝い、共にその喜びを分かち合った私たちが、再び、この御堂へと集められて参りました。それは、復活のイエス様が今も私たちと共にあるからであり、私たちがこうして再びこの場へと連れ戻されることになったのはそれゆえのことでもありました。そして、それはまた、イエス様のご復活がこの地上で起こったことであり、それゆえに、地上に生きる私たちの生涯の日々において繰り返されることになるのです。ですから、私たちがよく「私たちの人生の中心はイエス様」と言っていることは私たちの思いつきや気まぐれなどではありません。イエス様の甦り、ご復活が真実であり、正しいと、聖書がそう今も語り、また教会がそう証言するように、聖書の語る真実、そして、その正しさと、私たちがそこから離れずに生涯を過ごすからこそ、この繰り返しの中で、イエス様が中心であるということが自ずと腹に収まっていくものなのです。それはちょうど、お母さんの胸に抱かれた赤ちゃんが、そこで言葉を覚え、話すことができるようになるのと同じです。この日々の繰り返しの中で、私たちは神様とイエス様のことを必ず深く知らされることになる。私たちの信仰とはそういうものであり、そういうふうにできているのです。ですから、そういう意味で、聖書の言葉が分かる分からないと焦ったり、あくせくしたりする必要はありません。また、自らの人生についても、太く短くとか、細く長くとか、与えられた命について、自分であれこれ考える必要もありません。すべては主の御心の内にある、イースターは、イエス様の復活を真実で正しいと信じる私たちに、その御心の内にあればこそ、それが事実であることを明らかにしたのです。なぜなら、それが、イエス様の復活がこの地上で起こったということでもあるからです。

そこで、今申し上げた主の御心の内に私たちの命があるということ、つまり、私たち信仰者の生涯はこの主の御心の内

にあるということでもありますが、ですから、今日の説教題を「私たち信仰者の生涯」としたのはそれゆえのことでもありました。けれども、そこにはもう一つの別の理由もありました。それはイザヤ書 65:22 節の次の御言葉によるものです。そこには、「わたしの民の一生は木の一生のようになり、私に選ばれた者らは彼らの手の業にまさって長らえる」とあるのですが、人間の一生、生涯を木の一生にたとえているところに以前より心引かれていたからです。そして、その理由は、人の一生が、太いか細いか、長いか短い、か、そういうあれかこれかという思い上がったところからでもなく、またあれもこれもという欲張ったところからでもなく、ただ一本の木のようなものであるのみ語っているからです。けれども、その前後を見て行くと、そうとばかりは言えないことに気がつかされます。なぜなら、「わたしの民の一生は木の一生のようになり」とあるこの一文の最後には「長らえる」ということがはっきりと語られているからです。ですから、そう考えると、やはり、太いか細いか、長いか短い、か、多いか少ないか、大きいか小さいか、様々なものとの比較において、これがいい、これが一番、これが絶対だと、そういうことを御言葉がここで語っているとも言えるのでしょう。つまりは、御言葉が語るころは、信仰は多くを手にするための方程式、上手に生きる上での生き方マニュアル、そういうものであるということです。そして、そのように考える人は少なくないようにも思うのです。

ですから、そこで、もし、人から、信仰は太く長くだよねと言われれば、御言葉がそのように語っているわけですから、確かにその通りだとお答えするしかありません。けれども、そこで少し見方を変えようとどうでしょう。私たちがもし木であったとしたら、つまり、木の気持ちになって考えるならどうということになるのでしょうか。太いか細いか、長いか短いかは、それは確かに事実としてはその通

りなのかもしれません。けれども、木にとってそのことが一番大きな関心事となり得るのか、「一本の木のように」との譬えは、そういう人間の関心事からではなく、むしろそういうところから離れたところで語られているものなのではないでしょうか。そこで、木の気持ちになって、長らえるということを考えてみたいのですが、それは、根を張り、多くの恵みを地より受け取ると言うことです。また、枝を張り、空からたくさんのものをいただくということです。そして、それは、自分だけの満足、拘りのためにそうするわけではありません。長らえ、大きく、太くなるということは、木が自分のためにそうなろうとしてそうなるものではないからです。神様の恵みをいただき、結果そうなるということで、しかも、そこには目的があります。木が長らえるのは、多くの命を養い、支えられるようになるためです。そして、先日、あるテレビ番組を見ていて、それが事実その通りであることを思い知らされたのです。

番組の中で語られていたことは、熱帯雨林の大木には一体どれくらいの生き物がいるのかということでした。そして、調査の結果分かったことは、人間の目では追いきれないほどの数多くの生き物が大小様々一本の大木を住み処としていたということでした。ですから、それを見ていて多様性というものはそういうものかと改めて思わされたわけです。つまり、多様性とは、人の目で追い、手でつかみ取れる範囲の中だけのことではなく、むしろ、分からないし、手も届かない、そういう範囲のものまでを含めてのものであるということです。従って、私たちが持続可能性という言う場合についても同じことが言えます。なぜなら、多様性も持続可能性も、そういう目に見えない、手に届かないところものを無視して成り立つものではないからです。ですから、私たちの一生が木の一生に譬えられるということは、そういう意味で今日的なテーマたり得るのでしょうかし、また、第3イザヤが記したと言われている今日のこの御言葉の背景、つまり、バビロン捕囚後にエルサレムに帰還した状況を考えますと、御言葉が語らんとしていることは、

私たちの想像を超えた広がりを持つことにもなるのでしょうか。

そこで、一本の木に譬えられる私たちの生涯を、このイザヤ書の御言葉からも一度聞いていきたいのですが、そこで最初に気がつかされることは、私たちが生きるこの世界も、そして、私たちも、神様によって新しく造られたものだということです。そして、この新しさとはつまり、イエス様の復活を経験した私たちにとっては、イエス・キリストということです。ただし、それは、イエス様が生まれたか産まれなかったかということではありません。この地上で甦られたかどうかということであり、それがこの地上で確かにあったかなかったかということです。なぜなら、私たちにとって、それは真実であり、また、そう語られ、伝えられていることは、それゆえに正しいことだからです。ですから、イエス様の甦りを真実、正しいと受け止めることのできる私たちは、喜び踊り、また喜び楽しみ、その生涯を過ごすことになるのです。それは、新たに造られた私たちのことを、誰でもない、神様ご自身が喜びとし、また楽しみとされているからです。だから、私たちの中では、もはや泣く者も叫び声を上げる者もおりません。夭折する者も天寿を全うできぬ者もないのです。すべてが神様の祝福の許に置かれ、命を命として、まさに命のままを喜び楽しみ生きることができるようです。それゆえ、御言葉は次のようにも語ります。「狼と小羊は共に草を食み、獅子は牛のように藁を食べ、蛇は塵を食べ物とし、私の聖なる山のどこにおいても、害することも滅ぼすこともない」と、主なる神様の言葉をこのように私たちに語るのですが、それは、私たちの生涯というものが争いや諍いの中にあるのではなく、主にある平安の内に置かれているものであるからです。

ただし、それをはっきりとさせるためには、一つ、忘れてはならないことがあります。「私の聖なる山のどこにおいても」とある御言葉はそれを私たちに語るのですが、つまりは、はっきりと線が引かれているということです。それゆえ、この線の向こう側に行ってはならない、

それが私たちの信仰であるということですから、21節、22節で「彼らは家を建てて住み、ぶどうを植えてその実を食べる。彼らが建てたものに他国人が住むことはなく、彼らが植えたものを他国人が食べることもない」と語られていることは、そういう意味での内と外とを現しているのは間違いありません。従って、この内か外かということは、私たち当事者にとっては大問題となるのです。

では、この越えてはならない一線を一体誰が決めるのでしょうか。それが神様であるのは間違いありませんが、ならばどのようにして誰があっちで誰がこっちだと見分ければいいのでしょうか。イエス様が生きた時代、それを決めていたのがユダヤ教の指導者たちでした。つまりは、宗教的権威がその決定に携わっていたということです。ですから、今日の福音書の御言葉は、そうした背景を私たちに伝えてくれているのですが、しかし、宗教的権威が下したその判断は明らかに間違っていました。それどころか、それは不当であり、それゆえ、宗教的権威と目されている人々のしていることは、その権威を自ら貶めていると言えるでしょう。また、それだけではありません。悪意、憎悪、敵意と、感情に溺れ、また流され、我を失いそのような行動に出たというならまだ理解できます。けれども、彼らは至って冷静です。自らが何をしているかをはっきり理解した上で、イエス様の甦りの事実をねじ曲げようとしているのです。ですから、彼らの行為は、人々を欺くだけでなく、神様の顔に泥を塗るに等しいものです。それゆえ、この時の彼らが神様の祝福の外に置かれているのは間違いありません。しかし、悲しいことに、御言葉は彼らの試みが失敗したと言わないのです。「この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている」とあるように、イエス様の甦りが嘘偽りであると、人々の間ではまことしやかに語り継がれることになったということです。

こうして、宗教的権威の目論見は見事に成功したのですが、それを語るのは、他にもない、御言葉です。従って、このことはつまり、イエス様の甦りの事実が

ねじ曲げられただけでなく、結果、神様の御心の内か外かということも曖昧にされてしまったと、そのように理解することもできるのでしょう。ですから、このことの影響は非常に大きいように思います。私たちが自分は間違っていない、間違っているのはあいつらだと、言え言えほど、自分の立場がどんどん悪くなっていくということです。そして、それがイエス様の甦りの直後にこの地上であったことであり、けれども、そういうことは、人の一生において往々にして起こりうることでもあるのでしょう。ですから、そういう意味では、イエス様の甦りもその例外ではなかったということです。なぜなら、イエス様の甦りがこの地上で起こったということは、常にそのように人々の思惑の中に置かれているものでもあるからです。ですから、私たちがイエス様の甦りとその正しさを主張し、たちまちの中に批判に曝されるのはそのためです。それゆえ、ここに記されていることは、この地上であったことであるがゆえに私たちにあって他人事ではありません。しかし、それだけにまた、私たちは、事実を事実として受け止められず、悪意をもって真実をねじ曲げようとする人々を認めることができないのですが、けれども、御言葉が私たちに求めることは、そこで泡飛ばして何かを主張することではありません。もしそうであるなら、どうして、「今日に至るまで」と、イエス様の甦りを信じる私たちにあって不利になる事実を敢えて伝えようとしているのでしょうか。それは、私たちが正しく、向こうが間違っていると聞いたからではありません。

イエス様の甦りについては真実であり、それゆえ、それが真実であることを伝えることは正しいことです。けれども、御言葉が私たちにあって不利な事実を伝えるように、イエス様の甦りの真実も、そして、その正しさも、誰が内で誰が外かを決めつけるためのものではありません。むしろ、そういうところから意識的に離れ、何かを語ろうととしているように思うのです。そして、それが冒頭で申し上げた木の気持ちになって、ということでもあります。それは、私たちがどうし

でも自分の気持ちや考えに拘り、自分の願いを果たすこと、自分の思いを実現すること、それを信仰だ、それが、イエス様の甦りがこの地上で起こったことの果実だと、どうしてもそちらの方向に流されてしまうものだからです。けれども、イエス様の復活がこの地上で起こったということは、そのような意味での内か外かを明らかにするものではありません。イザヤ書にあるように、確かに内か外かということはありません。けれども、内か外かを決めるのは、他でもない神様であり、イエス様の甦りの出来事はその神様がなさったことでもあるのです。つまり、悪意をもって偽りの証言をする人々にも、私たちにも、決して閉ざされてはいないことを伝えるのです。なぜなら、私たちの目の前にある番兵の姿も、また、ユダヤ教指導者たちの姿も、私たちの姿そのものでもあるからです。

イザヤ書が人の一生を木の一生に譬えるように、様々な局面において、人は様々な姿を見せるものです。それが私たちがこうして地上に生きているということでもあるからです。そして、この地上にイエス様は甦られたわけですが、それは、人を選び好みするためではありません。イエス様がご自分を見捨てた弟子たちを招かれたように、その弟子たちと対極にある人々をも招こうとされているのです。ですから、信仰によって御心の内側にあると私たちがよくよく理解することができるなら、彼らの罪をあげつらうことなど私たちにはできないはずですが。けれども、それは、私たちが彼らの罪に目をつぶることではありません。御心の内側にある自らの姿を認めるということは、イエス様の甦りがこの地上で起こったことだと認めることであり、つまりは、事実を事実として理解し、また現実を現実として受け止めるということです。そして、それは、一步退いて距離を置いて、目の前にある事柄を冷静に見つめ、そこで我が身を御心の内側に置いて、共にあるイエス様にすべてを委ねるということです。

けれども、それは簡単なことではありません。どうしても自分の気持ちや考えが先に立ってしまうのが私たちだからで

す。まただから、始末の悪いことに、そのようなとき、私たちは自分で自分を守ろうとして、このユダヤ教指導者のような振る舞いをなすのです。つまり、真実をねじ曲げ、誤魔化してしまうのはそれゆえのことであるということです。ですから、そういう意味で、自分に毒があることを理解していることは大事なことです。また、時に毒をはくことも必要な事でもあるのです。けれども、それは誰に対してか、ということです。イエス様の御心の中にあることが分かっているならば、毒をはく相手はイエス様です。けれども、それが分かっているとき、誰に毒をはくことになるのか、それは私たちにとっては言わずと知れたことです。そこで渡邊和子さんが仰っていたことを思い出しますが、私たちの生涯においては、花を咲かせ、大きく枝を伸ばすことができない時がたくさんあります。ですから、そのような時、私たちはどうすればいいのかと深く悩み苦しむことになります。そこで、思い出したことが渡邊和子さんの言葉であります。それは、深く深く地に根を張るということです。イエス様の甦りがこの地上で起こったということは、大きく枝を張る出来事であると同時に、深く深く地に根を張る出来事であったということです。そして、「木の一生のように」と言われていることは、まさにそういうことであり、それが私たち信仰者の生涯であるということです。また、だから、私たちは木の一生のようにその枝を張り、葉を茂らせ、あるいは、深く深く地に根を張り、多くの命を育むことができるのです。そして、そこで大切なことはこの地上で私たちが立つべきところに立ち続けることでもあります。それがイエス様の十字架と復活の出来事であり、それが、私たちが今こうして聞いている御言葉の上であるということです。そして、私たち藤沢教会はそのような教会であると、私はそう思います。それは、私たちが復活のイエス様を信じるがゆえに、神様の御心の中に生きているからです。祈りましょう。